

ブドウ‘紫玉’の無核栽培における果実品質と収量

福田浩幸・松瀬政司・稲富和弘
(佐賀県果樹試験場)Hiroyuki FUKUDA, Masashi MATSUSE and Kazuhiro INADOMI :
Fruit Quality and Yield of Seedless ‘Sigyoku’ Grape

佐賀県におけるブドウ栽培は、5月に収穫する早期加温ハウス栽培を除き、梅雨期の長雨・日照不足、夜間の高湿等の影響による着色の遅れや商品性の低下が問題となっている。このような気象条件下でも着色が良く、早期収穫が可能で高収量が確保できる品種の選抜が必要である。そこで、着色が良好な品種‘紫玉’の無核栽培における成熟期並びに果実品質、収量性について調査し、佐賀県における適応性を検討した。

1. 材料および方法

加温ハウス内に植栽した5年生の‘紫玉’を用い、加温は2000年2月8日に開始した。比較品種として無核栽培の‘巨峰’を供試し、ジベレリン処理は‘紫玉’と同じ処理を行った。1回目のジベレリン処理は満開期の4月7日に行い、処理濃度はジベレリン25ppmとし、フルメット液剤5ppmを加用して処理した。第2回目処理は1回目処理の13日後にジベレリン25ppmを単用で処理した。いずれも花(果)房浸漬とした。花穂整形は先端をつみ取り、その上約4cmを利用した。果実品質の推移は各品種5房について、1房2粒ずつを採取し、5月23日からほぼ10日おきに糖度および酸含量を測定した。収穫は‘紫玉’が6月28日に、‘巨峰’は7月18日に一斉収穫し果実品質および収量を調査した。果実品質調査は1樹10房についておこなったが、着色は収穫したすべての房を調査した。1樹当たりの樹冠面積と着房数を6月14日に調査し、単位面積当たりの着房数を算出した。

2. 結果および考察

1) ‘紫玉’の糖度は5月23日には11.2で巨峰の9.4より約2度高く、6月14日には2.7度高く推移した(第1図)。酸含量は5月23日ですでに1.92%で‘巨峰’の2.97%より約1%低かった(第2図)。着色始めは‘紫玉’が5月10日頃、‘巨峰’が5月20日頃で約10日早かった。‘紫玉’は‘巨峰’に比べ着色開始や糖の上昇、減酸が早く、開花75日後の6月20日頃は収穫可能となった(第1表)。

2) 収穫時の果実品質は、糖度、着色とも‘紫玉’が高かった。果房重は‘紫玉’、‘巨峰’間に大差はなく、450~500gであった。また、一粒重は‘紫玉’がやや小さかった(第2表)。カラーチャート値10以上の着色良好な果房の割合は、‘紫玉’が72%と高く、‘巨峰’は50%であった(第3図)。

3) m²当たり着房数と平均果房重から算出した10a当たり換算収量は、‘巨峰’、‘紫玉’ともに約1.7tであった(第3表)。

4) 以上のことから、無核栽培した‘紫玉’は、1房450~500gの果実生産が可能であり、‘巨峰’に比べ糖度が高く、着色が良好で20日程度熟期が早かった。推定収量は‘巨峰’とほぼ同じであり、10a当たり1.7tの生

産は可能であると思われた。

‘紫玉’は佐賀県のような高温、多雨の気象条件下においても着色が良好で、特に梅雨期間中に成熟期を迎える作型の施設栽培において、‘巨峰’より早期収穫が可能になると思われた。

第1表 品種別生育時期の違い

品種名	加温開始	満開期	着色始め	収穫始	満開~収穫始までの日数
紫玉	2/8	4/7	5/10	6/20~	75日
巨峰	2/8	4/5	5/20	7/10~	95日

第2表 収穫時の品種別果実品質

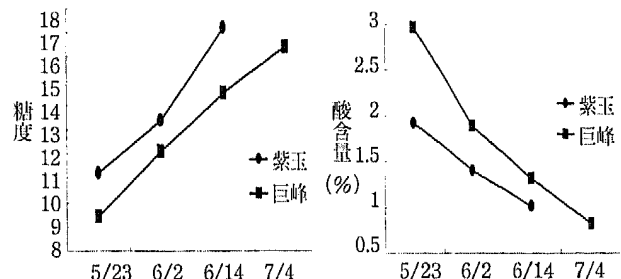
品種名	果房長(mm)	果房重(g)	着粒数	一粒重(g)	着色 ^{a)}	糖度	酸含量(%)	pH
紫玉	162.2	477.4	47.8	10.0	10.8	19.5	0.65	3.46
巨峰	159.2	466.7	43.4	10.8	9.4	17.2	0.57	3.56

注) a) 調査日: 紫玉6/29, 巨峰7/18

b) ^{a)}着色はカラーチャート値

第3表 換算収量の比較

	着房数/m ²	平均果房重(g)/樹	換算収量(kg) ^{a)}
紫玉	4.5	477	1717
巨峰	4.6	467	1719

注) ^{a)}換算収量 = m²当たり着房数 × 平均果房重 × 1,000 × 0.8

第1図 着色期以降の品種別糖度の推移

第2図 着色期以降の品種別酸含量の推移

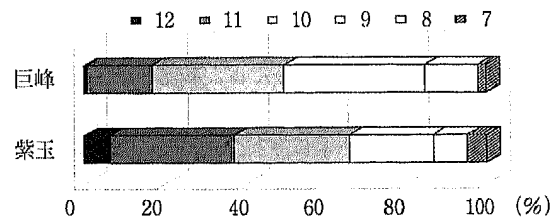
第3図 収穫時の品種別果実の着色^{a)}度の違い注) ^{a)} カラーチャート値

写真1 無核栽培‘紫玉’の着果状況